

こころ日記

「ぼちぼち・」

不登校は病気？

脇野 千恵

以前は学校に来ない、来られないことを「登校拒否」と言っていましたが、今は「不登校」と言います。どう違うのかわかりませんが、いつの間にか、どの学校にも「不登校児（生）」がいるのは当たり前になってしまいました。

担任をしていた頃、自分の中の学級目標は、“毎日全員揃って学校に来る！”でした。「休むと損だぞ！」と、学校に来させるための色々な工夫を考えたものです。

しかし、病気や、怪我、忌引きなどで欠席するのはやむを得ませんが、なにかのきっかけでだらだらと休み始める子がいると、何かとてもやっかいに思えてなりません。まじめな教師の悪い癖で、なぜ？原因はどこに？だれにあるの？私なんか言ったかな？とあれこれ考えてしまい、形は見えていても味も匂いもわからない食材を前にして、どう料理しようかという心境でした。

ある年、小学校1年生の5月からずっと

卒業するまで不登校児だったK介を担当することになりました。教師がクラスを選ぶのは、生徒指導上の様々な事情によると前号で述べましたが、これもまた、私にとって“持たされた！”感がぬぐえないものでした。

「反社会的」はわかりやすく、やりやすいのですが、「不登校」となると…。

苦手とする者としては、

- ・ どうしたら学校に来させることができるのだろうか？
- ・ 家庭にはどんな暮らしがあるのか？
- ・ 今まで小学校の先生は一体何をしていたのか？

と怒りまでが湧いてきました。

たいてい私が持つクラスは、

- ・ 欠席する子がない！
- ・ 体育大会など、学級対抗の競技は必ずとっていいほど優勝する！

といったクラスになっていったものです。

しかし、入学式当日から誰も座らない席

が一つ。それを見るたびに、ため息が出るばかりでした。やがて生徒たちは不登校生に慣れてくると、こんなことを言い始めます。

「なんできーひんのや？」

ええなあ、学校さぼれて」

「どうせ来るわけないやん。

机、使ってもええやろ」

「一体どんな顔してるんや？」

空いた席が日常化しないように、少しでも理解してもらいたいと、K介の情報を学級通信に載せたり、帰りの会などでも話をしました。しかし、教育的配慮とは裏腹に、K介の状況は全く変化していませんでした。

当時の私はそれほどいろいろな知恵を持たない頃でしたので、いるようでいない生徒を抱えての学級経営は、本当に何かやるせない思いでした。

とはいえ、私は義務感のように毎週一回は必ず家庭訪問をし、学力をつけるために簡単な計算や漢字練習などの勉強をみていました。

彼はおとなしく寡黙な子でした。こちらの質問には頷き返事をするのですが、会話がほとんど成立しませんでした。いつも母親が横に座っていたことも原因していたかもしれません。

生徒指導部は学校の要の組織ですが、今や教育相談部も重要な役目を担っています。様々な子どもの問題についての対応、保護者面談計画など多忙な仕事となっています。そのためのSC（スクールカウンセラー）が配置されていますが、K介も教育相談のケース会議にかけられ、特別にSCが家庭

訪問をするといった対応がとられました。何でも自分で取り組みたい私は、たとえSCという“心の専門家”であってもすぐに成果がでないことに苛立ち、「なんだかなあ」と自分の力のなさを嘆くばかりでした。

2年次になり、母親の不安の一つであった「発達の障がい」という悩みを解消するために、SCの提案で発達検査をする事になりました。

家から出られない子にどうやって検査をするのか？といった疑問がわきましたが、自宅に検査道具を持ち込んでの検査となりました。それって本当の検査？とまたまた疑問がわいてきた私でしたが…。

検査の結果は、自閉的傾向？が見られるとのことでした。知的には問題がないとの診断。小学校の時に、担任から「ひょっとして発達障がいかも？」と言われたことが、母親の中でずっとトラウマになっていたようです。早速、SCから心療内科への受診を勧められました。しかし、K介を外へ連れ出すことの困難さから、たった一回の通院で終了しました。

そうこうするうちに3年次になりました。中学校での3年間はあっという間です。もう卒業後の進路についての話をしていかなければなりません。K介との関係はいよいよ3年目に突入しました。

K介の家族は父母、3歳上の姉の4人家族でした。姉は、中学3年の後半より不登校となり、単位制の高校に進学していました。実は家庭訪問をする中で、いつも父母の仲がどうなのかなあと気になっていましたが、ある日突然、母親から離婚の報告を

受けました。母子家庭となったK介の家は、風穴を明けたように今までとは違う空気が流れていました。

正直、不登校生への進路指導が一番難しい課題です。何せ出席日数が半端なく0（ゼロ）に近いのですから。それでも卒業させてしまうことに、いつも残酷さを思う私です。中学校から高校への進路に必要なのは内申書ですが、K介は出席をしていないので、肝心の成績がつけられていませんでした。

「内申書」（子どもたちは見ることができないものですが）。生徒たちが3年生になると一番に意識するもので、「内申書」のためなら、何でも頑張る子が本当に多くなります。

K介は、他の生徒のように公立高校を受検することは難しく、かといって単位制の私学を選択することは経済的に不可能でした。

学年での話し合いの末、進路先の一つとして「養護学校」という案が持ち上がりました。「特別支援学校」というネーミングに変更されたときでしたが、

不登校によって

- ・学力がついていない。
- ・集団行動の経験がないため社会性が身につけていない。

といった生徒も受検することができるというニュアンスの文言にひかれての提案でした。

当初、普通高校を希望していた母親でしたが、養護学校の体験入学を勧めてみました。体験中に、K介が今までにないほど色々な作業に熱心に取り組む姿を見ていた母親

は、K介の進路先を養護学校の高等部にと決めたのでした。進路担当者としては、「これで安心！」といった思いだったことでしょう。

K介は、きちんと小学校に通えていたら、しっかりと学力のついた子どもでした。中学校でも、きっと勉強に部活に忙しい生活を送ったことだろうと想像できました。

彼の進路先が本当に養護学校でよかったのかどうか？心から喜べないのが正直な気持ちでした。果たして毎日通えるのだろうか？もしまた不登校になれば、それこそ社会から孤立し、いわゆる「ひきこもり」になってしまうのではないだろうか？色々な心配事が湧いてきました。

3月、K介の卒業式は校長室で行われました。

3年間担任をしたけれど、進路先が決まったとはいえ、私は彼を学校に来させることができなかった…。中学校生活での様々な行事にも参加させることができなかった…。後悔と自責の念ばかりでした。

3年間K介の家に通い続けたこと、K介親子と共有した時間だけが、深く心に刻まれていました。

今学校では、本当に不登校が増え続けています。不登校は長引かせない、初期対応が重要であるといったことが、最近ようやくわかってきた私です。

予算削減の中、週数時間内でのSCの来校。残念ながら、継続的な対応に期待できないのが現状です。SCの力を借りることも大切ですが、あまりにも自分の無力さを

さらけ出し、問題を丸投げしてしまうという教員がいることがとても気になります。学校に来られないことが、“心の病氣”であると思込んでしまうことも、とても危険な判断だとも思っています。

さらに今流行のアスペルガーや、ADHD、LDなどの発達的な問題があると診断をされることで、「やっぱり！」と妙に納得してしまう教員や親も危険だなあと。

幸いK介の場合、心療内科での投薬治療には至らなかったのですが、学校から関係機関へ繋ぐルートの一つとして、病院への通院が増えていることも気になっています。薬を飲まないと思寝れない、落ち着かない子が、保健室にたくさんやってくるのも事実です。

思春期において、成長にともなったホルモンの分泌による気持ちの不安定さはつきものです。子どもから大人に近づく姿をみると、日々悩み、もがき、今怒っているかと思えばもう笑っている。そして自分という正体に、日々葛藤しながら生活しているのです。

学校へ行きたくないと訴えるのも、思春期だからこその症状だと考えられます。本当に病氣かもしれない、薬も必要かもしれないけれど、子どもをちゃんと見る目をもつ大人が、もっともってほしいと願うばかりです。

その後のK介…

9年間自宅からほとんど出たことがなかったK介は、卒業後、水を得た魚のように休まず養護学校へ通うようになりました。

スクールバス通学から、1か月後には電

車通学に。養護学校は作業が中心ですが、園芸や陶芸など何をしてもしリーダー性を発揮しました。学習への意欲も高まり、学力をつけるために放課後は塾へも通うようになりました。クラスでは学級委員。バスケットボールクラブに入部し、なかなか運動能力の高い生徒とほめてもらっていたそうです。

もう一つ、彼をさらに大きく成長させた出来事がありました。それは“恋愛”です。これには、私自身も大変な驚きでした。

同じ高等部の一つ年上の女子との交際。介護が必要な彼女とデートする姿が、街で何度も目撃されました。その彼女も、K介とつき合うことで、身体的自立が向上したと聞いています。

進路を考える2年生の終わり、K介から、メールが届きました。

「先生、実はどうしても卒業後に進学をしたいのですが、可能でしょうか？」

といったことでした。

養護学校は、高等学校の教育課程とは全く異なります。大学進学となると、大検しかありません。とても厳しい道です。

K介は、福祉の仕事をしたいのだと打ち明けてくれました。養護学校での色々な経験や体験が、大学という進路希望へと導いたのでしょうか。

今K介は、希望通りの福祉学科に入学し、大学生としての生活送っています。やがて、福祉現場で働く姿を見ることができるようそう遠くはないでしょう。

(中学校教員 脇野千恵)